

第1回仕組みづくり部会等の結果について

○ 札幌地区・仕組みづくり部会

日時：9月5日（水）9：30～11：30

場所：北海道森林管理局 中会議室

委員氏名	所属等
菅野 光洋	北海道旅客鉄道（株） 開発事業本部副本部長
久保田 学	（財）北海道環境財団 企画事業課長
鈴木 幸夫	朝日新聞社北海道支社広告チーム マネージャー
丹羽 祐而	（株）丹羽企画研究所 代表取締役
森末 忍	（株）北海道アパルト情報社 事業支援室 プランナー

○ 知床地区・仕組みづくり部会

日時：9月7日（金）15：00～17：00

場所：知床森林センター 会議室

委員氏名	所属等
石見 公夫	知床ガイド協議会 会長
田澤 道広	羅臼町（（財）知床財団出向中 羅臼地区担当次長）
上野 洋司	知床斜里町観光協会 会長
村田 良介 （代理 増田 泰）	斜里町 環境保全課長 （自然保護係長）
山中 正実	知床財団 事務局長
（欠 席）	知床羅臼町観光協会

○ 東京地区 ヒアリング

日時：9月6日（木）14：00～16：15

委員氏名	所属等
楓 千里	（株）JTBパブリッシング法人事業部部長

○ 北見地区 ヒアリング

日時：9月7日（金）19：00～20：00

委員氏名	所属等
田澤 由利	（株）ワイズスタッフ代表取締役

（敬称略、五十音順）

1. 「知床自然の森林再生ビジョン」のあり方について

- 目標を明確にすれば、国民や企業が1つの目標に向かってその役割の一部に参加するという意識につながる。森林のあるべき姿とそれを目指すステップが示されれば、国民や企業等が共通認識をもって森林づくりに参加できる。
- 目標が明確に伝わる、わかりやすいキャッチフレーズをつけることが有効。
- 「自然の森林」とは、昆虫や菌類も含めて本来、知床で生息している生物が暮らしていくことができる林層をつくる「森林」であり、その森林と人との関りについて考えていくことが重要。

2. 知床における森林づくり体験プログラムについて

- 活動を通して、参加者に「知床の森林づくりに参加している」という意識を持っていただくことが重要。
- 森林づくり、あるいは森林に係わることは楽しいことだと感じてもらえるような活動を目指すべき。例えば、知床に植えた木を何年後かに再び見に来たくなるような心に残るツアーとして打ち出していけると良い。
- 知床の森林について、何かを学んで得られるようなプログラムを提供することが重要。
- 何度でも来てもらえるポイントの1つは、食の魅力。森などの自然の魅力とあわせてどういった美味しいものがあるかという情報を提供していくことも必要。
- 少人数であればよいが、多くの参加者に対応しようとするとコストが高くなる等、密度の高いプログラムを提供することが難しくなるというジレンマがある。提供するプログラムに見合った参加人数の想定を行うことも必要となる。

3. ツアー等のアイデアについて

- ツアーに訪れる人は、新たな要素を楽しみにする一方で、オーソドックスな観光も求めている。まずは、森林づくりと知床観光を組み合わせたものからスタートしてはどうか。
- 企業が作成するフリープランが用意されているゆとりのあるツアーに、森林づくり活動などの新たなオプションを組み込んでいけるとよいのではないか。
- 地元でツアーガイドをしている方々に、森林づくり活動などのプログラムを提示していけば、それらを組み込んだツアーを実施できるのではないか。
- 東京農大の網走校において、知床講座を開催し、森林づくりと観光とセットで展開すれば、多くの参加者が期待できるのではないか。また、宿泊費や滞在費などの面で地元還元することができる。
- 通常入れない場所に案内してもらうことができるプレミアムツアーを実施し、参加者に特別料金を負担していただく。その収益の一部を森林づくり費用に当てられるような仕組みを試行してはどうか。
- JTB関東のCO2ゼロ旅行（事例参照）のように、例えば航空会社などと森林版のプランを作って大きな取組ができればかなりのインパクトがある。

4. ツアーやプログラムのアプローチ手法について

- 知的好奇心や生活満足度をあげたい人等にターゲットを絞り、情報を発信する。
- 来年度に開催される洞爺湖サミットと連動し、知床の森林づくりツアーを集中的・効果的にPRを行う。
- 知床に訪れたことがない道内在住者を参加者のターゲットとし、リピーターにつなげる。
- 環境問題に貢献したいという潜在的な意欲を持っている人は多いため、具体的な行動が環境や森林に対しどのような効果があるのかを示したプログラムやツアーの仕組みがあれば、かなりの人が参加するのではないか。
- 繰り返し来ていただける層としては、子連れ層が期待できる。子連れ層をひきつけるようなツアープログラム開発が必要ではないか。
- 修学旅行や環境教育のプログラムについては、学校関係者が集まる会議などを利用して、集中的に普及活動を行うことが有効。
- 影響力のあるカリスマ的な人材によるPRも参加呼びかけの手法の1つ。

5. 活動フィールドについて

- 地元の人から見ると、遺産地域以外の森林の方が幅広い取組が可能であり、アクセス面等を考慮してもアイデア次第で可能性は広がるのではないか。
- 羅臼側に関しても、整備が行き届いた場所は少ないものの、活動フィールドとしての可能性は幅広い。(ガイドの力が試されるフィールド)
- ウトロからオシンコシンの滝までのエリアは、森林が有する様々なテーマを引き出すことができる多様性のある空間・場所と思われる。
- 川と森林との関わりというのも重要なポイント。湧水なども含めて森と水の関係も知床における1つの大きなテーマではないか。例えば、春刈古丹川は、シマフクロウ以外にも、川と森林の関わりを知る上で適した場所である。
- 森、海、川も含めた知床半島全体に広がる「多様性のある空間」があり、それにより森林再生の「夢」を描くことができる。

6. 企業の呼びかけ手法について

- 北海道内で環境分野のCSR活動を行っている企業は多いとは言えないが、環境分野の社会貢献を行いたいと考えていても具体的にどのようなことができるのかわからないといった企業もあるはずである。このため、企業に対し、環境分野での社会貢献として、知床の森林づくりや環境教育を通してどのような取組ができるのか提案をしていく必要がある。
- 企業による支援については、道内の企業に限らず、道外の大手企業も含めて検討すべき。道外の大手企業に関しては、環境分野の社会貢献の報告書等が公開されている企業も多いため、どの企業がこういったCSR活動に関心をもっていているかを把握し、知床の森林づくり活動への支援の仕組みを売り込んでいくことも必要である。

- CSRを進めるためには、社会貢献活動と企業活動がリンクすること、社会貢献活動が自社の持続的な発展にもつながっていることを説明できることが大事である。このため、企業に支援を依頼する際には、支援を依頼する活動と企業活動との関係性を見いだすことが必要であり、知床の森林づくりと企業活動との文脈作りが必要である。

7. 修学旅行について修学旅行の動向等について

- 北海道の場合、新千歳発着でなければ①費用の面で困難、②使用機材の大きさの面で困難である。道東コースを設定することは可能だが、ほとんどバスに乗っていることになるので、修学旅行は道内校に期待することになる。
- なお、私立校などでは、一年半前に行き先が決まり、旅行社の持ち込むプランのコンペで学生などが選んで一年位前までに決めるケースが多いので、内容に魅力があれば、採用されることになる。内容の意味づけが必要。

8. その他

- 人を送り込むための仕組みを検討する立場からは、現地の知床ではどのようなメニューが可能で、どのような受け入れ体制が確保できるのかといった情報を知りたい。このような情報をとりまとめ、共有できると具体的なアイデアを提案しやすい。
- 単に「世界自然遺産」をアピールして大手企業の参加を促すだけでなく、地元側との合意形成を得ながら企業参加、住民、NPOなどとの連携の場づくり等の活動を育てていくなど、多面的な手法を組み合わせながら進めていくことが必要ではないか。
- 森林づくりを実現するためには、施設などハード面の整備だけでなくガイドが森林づくりを教えられるように人材育成をしっかりと行っていくことが必要。